

小学校教師による、小5 社会科“森林資源”の教材研究—1 枚の写真を通して

## イノシシによって荒らされた里地の稲田

作成：橋本祥夫（はしもと よしお／京都教育大学附属京都小中学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）\*

語り：「稲がなぎ倒されていますね。どうしてこんなことが起こったのでしょうか。UFOのしわざ？ いえいえ、これは里に下りてきたイノシシのしわざなのです。なぜこのようなことが起こったのでしょうか。」

里地里山には、雑木林があり、田んぼや野菜畑、用水池などが作られ、そこに昆虫や小動物などが集まって豊かな自然が形成されます。集落の人によって維持管理される自然は、木の実や山菜、マキ、肥料としての落ち葉などの恵みをもたらすなど、暮らしにはなくてはならない存在です。これまで里地里山では、動物と人がうまく共存していました。しかし、里地里山における人の活動が縮小する一方で、野生動物による農林業の被害は過去に例がないほど強まっています。シカ、イノシシ、サルなどの野生動物が里に下りてきて、畑や人家を荒らすようになりました。

過疎化が進行した集落では、野生動物が人を恐れなくなり、日中でも田畑に出没して農作物を食い荒らします。農業をする人が減り、耕作放棄地が増えたことも、野生動物にとって好適なえさ場を提供することになっています。さらに、野生動



◀イノシシによって荒らされた稲田

物の数の管理の担い手である狩猟者も高齢化と減少が進行しており、狩猟システムの崩壊は時間の問題となっています。

野生動物の増加により、里地里山で農林業を継続する人もさらに減っていくという悪循環を生んでいます。野生動物の激増は、農林業被害だけではなく、時には自然の生態系にも悪影響を及ぼし、土壌流出や水源のかん養機能の低下など様々な問題を引き起こします。

里に下りてくる野生動物を悪者として駆除するだけではなく、生態系を維持しながら、野生動物と人が共存していくにはどうすればいいのかを考えていかなければなりません。そうすることが人々の暮らしを守ることにもなるのです。」

意図（橋本）：学習指導要領では、「国土の保全などのための森林資源の働き」を取り上げることになっている。学習指導要領解説社会編によれば、ここでは、「森林資源の働きと国民生活とのかわりを取り上げ、国土に広がる森林が、国民生活の舞台である国土の保全などに欠かすことのできない資源として重要な役割を果たしていることを調べることである」と解説されている。野生動物が里に下りてきて人に被害を与えている事例を考えることを通して、森林資源を有効に活用していた里地里山の働きに目を向け、それを守っていくにはどうすればいいのかを考えさせたい。そのことが国民生活の舞台である国土の保全にもつながることに気づかせていきたい。

寸評（山下）：これまでの社会科は里山の問題にあまり目を向けて来なかった。森林といえば、もっぱら奥山の天然林や林業地の人工林であった。現在、野生動物による被害が全国で問題となっているが、森林と私たちの生活とのかかわりを考えるうえで、里山の問題はよい教材となるはずである。

\*山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）